

4 遺 構

4-1 中 金 堂 (S B8000)

中金堂は発掘調査の成果からは4期の変遷が認められ、絵図なども参考にすると、5期の変遷が確認される。I期(創建期)、II期(奈良・平安時代)、III期(中世)、IV期(近世後期)、V期(廃仏毀釈以降)である。

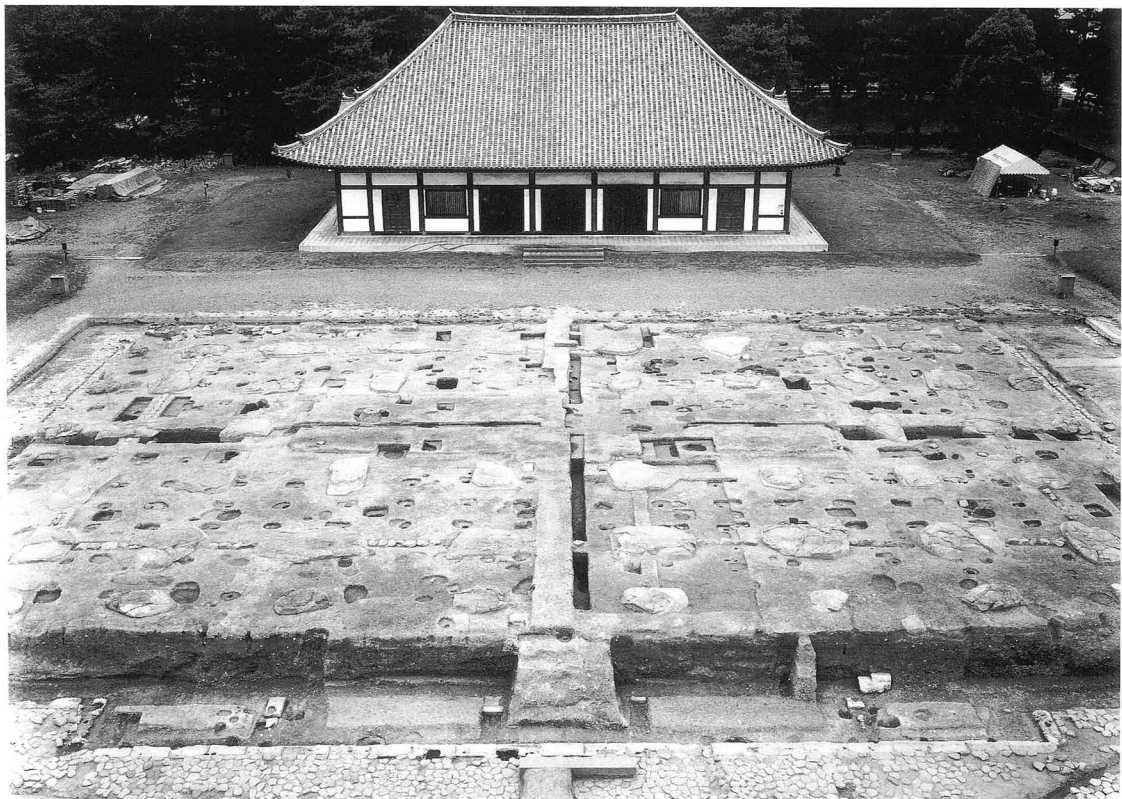
(1) 基 壇

興福寺中金堂は、若草山西麓から西へ伸びる春日野台地の西端部に位置する。調査前の中金堂周辺の標高は95.8mである。周辺の西・南は現状で崖状に落ち込み、北は緩やかに下がる。これまでの調査で、中門付近から東北方向にのびる谷地形等が確認されている。中金堂は、大阪層群の一部で、砂礫を含む明黄色粘土からなる独立小丘陵上にある。基壇は、この地山を削り出し、平坦にならした上に厚さ50cmほどの版築を施して形成される。版築は、薄緑色の粘土と、橙色のやや粗い土とを互層にして基壇全体に均一に堅く突き固める。基壇外側では標高95.2m、基壇上では96.6mで地山面を確認した。基壇高は、中央付近の版築最上面と、周囲の玉石敷き雨落溝S D8050底で比高差約1.8mである。

平面規模は、検出した基壇外装の外側で、I期は東西40.28m・南北27.11m、II期は東西40.93m・南北27.73m、V期では東西40.93m・南北27.52mである。

(2) 建 物

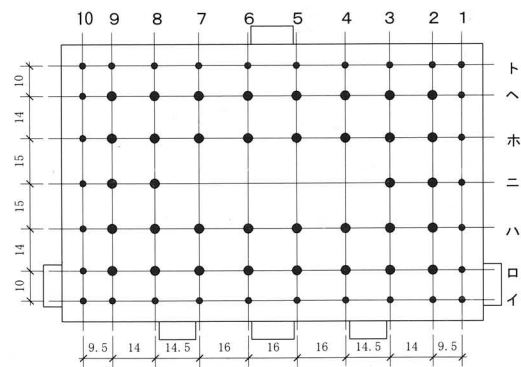
中金堂S B8000は五間×二間の身舎四周に庇・裳階がつく九間×六間の礎石建物である。IV・V期は、裳階部分を除いた一回り小さい建物S B8100となる。S B8000の各柱間は今回の調査所見から第6図の通りになる。基準尺長は、側柱筋で1尺 $\approx$ 0.295m。礎石は66基すべて現存し、64基が花崗岩系、2基が



第5図 調査区全景(南より)

安山岩である。礎石上面にはいずれも焼痕をとどめ、建物の外側ほど痛みが激しい。便宜上、東南隅を基点とし、西側に1～10、北側にイ～トと番付をした（第6図）。

入側柱・側柱礎石 身舎入側柱・廂側柱では、削り出した地山面から約40cmの版築を施し、そこから約90cm掘り下げる。30cmほどの根石を置き、その上に礎石を据える。礎石を据えてからさらに基壇全体に版築を施す（第23図）。礎石



第6図 礎石番付・柱間寸法図（単位：尺）

の外形は一定でないが、入側柱礎石ニー8で東西1.8m・南北1.3m・厚さ0.9m、側柱礎石ニー9で東西2.2m・南北1.4m・厚さ1.1mである。入側柱・側柱の礎石はいずれも創建期のもので、原位置を保つ。火災や、再建の際の加工により、損傷を受けているが、多くの礎石で円型柱座・地覆座の痕跡が確認される。柱座痕跡直径は入側柱礎石で約1.2m程度、側柱礎石で約1.4m程度、地覆座痕跡は幅約0.6m程度である。焼痕の差が直線状に連続する部分があるが、側柱礎石では柱が乗る部分にも通る（第7図）。

裳階柱礎石 礎石ニー10で東西1.6m・南北1.2m、厚さは推定0.4mである。礎石の据付掘形は、後述する足場穴より新しい（イー4・へー2）。柱座を有する礎石では、柱座が柱筋にのらないとみられる場合もある（ロー1）。ただし、現在の裳階柱礎石から大きくずれた据付掘形は検出されていない。なお、安山岩製の2基（トー3・8）は、上面に十字などの刻みを有し、据付掘形検出面は調査前の敷石裏込の直下で、据付埋土も他の礎石と異なる暗黒色の締まりの悪い土であり、後代の据え直しが確実である（第7図）。

壁S A 7940 側柱筋にまわり、I期の玉石の壁地覆根石列S X 7941を伴う。S X 7941の石の大きさは約30cm、据付掘形は幅80cm・深さ20cm。裳階部分には柱間装置の遺構はなく、吹き放しだったと考えられる。



第7図 礎石（左：ロー5・6、東より 右：へー2・トー2、北より）

足場 S S 7948 一辺約70cmのほぼ方形の掘形を持つ柱穴が、東西9列・南北6列に並ぶ。須弥壇 S X 7950の積土の下にも広がることから、I期建物を建てるための足場である。建物全体に関わる足場穴で検出したのは1組である。掘形の一つからは奈良時代の土器片が出土した。

落込状遺構 基壇の東壁で3基、北壁で1基、西壁で3基、南壁で1基観察された (S X 7925~7932)。入側柱・側柱礎石据付と同じ面から掘込み、S X 7926では深さ1.1mをはかる。S X 7925は基壇縁から80cm程度で取まるが、S X 7930は礎石据付掘形と連続して溝状の様相を呈する。埋土は突き固められる。また S X 7932を断ち割った際に基壇版築土の下の地山面で柱穴 S X 7998と東西溝 S D 7999南肩を検出した。

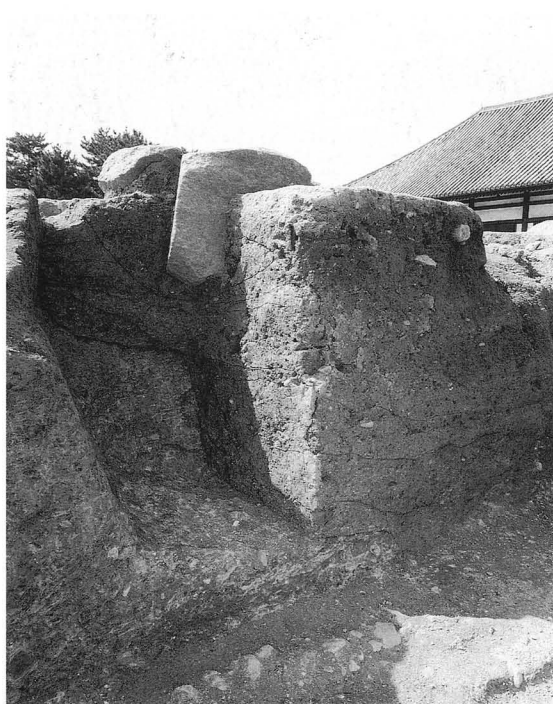
(3) 須弥壇

I~IV期須弥壇 S X 7950は、東西約21m・南北約7.5mで、基壇上に土を積んで形成される。南面中央に階段 S X 7951がつく。黒色土と黄褐色土の2層からなる。上層の黒色土中からは、銹着し孔に紐が残る和同開珎や、奈良時代の土器片が出土した。明治7年に削られ、本来の高さは不明であるが、S X 7951から80cm以上と推定される。

I期須弥壇外装 凝灰岩製で、地覆石 S X 7952・7953、地覆石抜取痕跡 S X 7954~7957からなる。礎石ハ-4~7の段状加工痕跡や焼痕と列をなす。ハ-5では S X 7951にともなう痕跡がL字状に南に延びる。北入側柱礎石では明瞭な加工痕跡・焼痕は確認できないが、ホ-7などでは平坦面を作り出す。

足場 S S 7969 黄褐色土上面から掘込まれ、黒色土で覆われる柱穴が、東西9列・南北3列並ぶ。S X 7950上にもみ分布し、S S 7948とは別の足場である。身舎の荘厳のための足場であろう。

壁 S A 7958 身舎の南面を除く三方向に回る。IIまたはIII期に、北面中央を除く柱間中央に掘立柱の間柱 S X 7959~7966が建つ。間柱据付掘形は1.4m×0.8mの長方形で、長辺を柱筋に直交させる。S X 7961で深さ1.8m。柱抜取痕跡直径は約50cmで、壁は強く焼けている。壁地覆石列 S X 7967は、S A 7958の凝灰岩製の地覆石で、幅25cmほどである。



第8図 S X 7926 (南東より)



第9図 須弥壇全景 (西より)

(4) 基壇外装

I期基壇外装 凝灰岩製で、階段積土下で地覆石 S X 7971～7975、II期以降の階段積土下で抜取痕跡 S X 7976～7978を検出した。S X 7971・7972・7973・7975では、階段積土の中はそれら1石のみで、さらに奥に石列は続かない。北階段部分の S X 7972では長さ70cm・奥行き27cm・高さ46cmであり、階段外側から24cm分の基壇側の上面幅8cmを深さ8cmほど切り欠き、羽目石の仕口とする。他の地覆石もほぼ同じ大きさで、羽目石を載せる加工が施される。地覆石の抜取のレベルは S X 7978で95.3m、地覆石の下端も S X 7975で約95.3m、天端は95.62mである。I期凝灰岩地覆石はいずれもほとんど風化しておらず、良好な状態であった。

II期基壇外装 凝灰岩製で、一石が長さ105cm・奥行き40cm・厚さ17cmほどの延石列 S X 7981～7985からなる。東西辺では残存状況が悪いが、南面西半では完全に遺存する。延石はいずれも基壇側10cm程度平坦面が残り、外側はえぐれる。天端は約95.3mであり、I期地覆石の天端より30～40cmほど低い。なお S X 7981～7985は、地覆石の可能性もある。また、南側中央付近基壇縁の凝灰岩は、葛石痕跡とみられ (S X 7945・7946)、I・II期基壇外装は凝灰岩切石を用いた壇正積である。

III期以降の基壇外装 III期基壇外装の遺構は検出していない。古図や東金堂基壇の所見から、花崗岩の壇正積であろうと想定される。IV期基壇外装は石垣 S X 7987で、S X 8035の北入隅部などで確認した。V期の花崗岩壇正積基壇外装 S X 7988の地覆石は、奥行きは35cmでほぼ共通するが、厚さ・長さは不揃いである。花崗岩割石を根石とし、漆喰を詰め据え付ける。羽目石は、コンクリートで地覆石に固定されていた。

(5) 南面階段

I期南面階段 身舎中央間および東西端の間にそれぞれ一間幅の階段が計3基つく (S X 8001・S X 8005・8010)。階段幅は地覆石の外側で4.15mで、S B 8000中央一間分よりもやや狭い。3基共同じ幅である。階段の出は約1.8mと推定される。S X 8005は階段積土下半が、S X 8001は、基底部と、基壇に



第10図 S X 7972 (北より)

第11図 S X 7963 (北より)



第12図 須弥壇南側の様子

(S S 7969・S S 7848・礎石ハ-5他)

Y=-15,230

Y=-15,190

X=-146,400

X=-146,420

1999年度調査区

第13図 発掘調査遺構図 (1:150)

接する部分の積土が、S X 8010は基底部の積土が残存する。明黄褐色土を主体として互層で突き固め積土とする。外装は凝灰岩製。S X 8005の東西にある南北地覆石列 S X 8006・8007は、大きさが不揃いな長方形の材を、外面を合わせて横長に並べる。S X 8001西側南北地覆石 S X 8002も同様だが、S X 8010東側南北地覆石 S X 8011は長方形の石材を南北に用いる。これらの凝灰岩は、ほとんど風化していない。階段地覆石の厚みは15cm、天端は95.32mほどで、基壇本体地覆石の天端より30cmほど低い。S X 8005の東西の地覆石採取痕跡 S X 8008・8009は深さ17cmほどであるのに対し、検出面が同じ基壇地覆石採取痕跡 S X 7977・7978は深さ5cmと浅く、据付レベルも異なる。

II期南面階段 I期の階段の間に積土を施し、通しの五間幅階段 S X 8020に改造する。改造時に I期階段の外装を外し、改めて凝灰岩の外装を施しなおす。凝灰岩地覆石列（S X 8021）は一石の長さ約100cmで、それ以外の大きさ・形態・レベルなどは基壇本体のII期延石と一致する。幅は24.2mで身舎正面の幅とほぼ一致し、出は1.95m。S X 8020に改造する際、新たに積まれた積土は、円礫・凝灰岩片を含む暗褐色土を主体とし、この土からは奈良時代の土器のみが出土した。

IV・V期南面階段 五間幅階段を S B 8100建設時に建物規模の縮小にあわせて切り縮めた三間幅階段 S X 8023である。近代に積土を足し、外装を整える。調査前の状況で階段幅13.6m、階段の出は2.8mであった。

（6）北面階段

北面階段は、時期により大きさに多少の差があるものの、全期間を通して一間幅である。

I期北面階段 S X 8025は、幅4.15mで、出は1.85m。外装は凝灰岩製。S X 8025の地覆石列 S X 8026・8027は、厚さ15cmほどで外面をそろえるが、長さ・奥行きは不揃いである。天端は95.42mで、S X 7972・7973より約30cm低く、南面階段の S X 8007などの天端とほぼ同じレベルである。基壇本体地覆石より出の部分の地覆石が低い状態等、I期南面階段と共通する。

II期北面階段 S X 8028は、幅5.6mで、出は1.85mである。S X 8028の地覆石列 S X 8029は、厚さ20cm



第14図 基壇南面の様子（左：S X 7985他、西より 右：S X 8001、南より）

ほどの凝灰岩を用いる。外面は、後述する玉石の雨落溝 S D 8051 にそろう。東西辺の地覆石の多くは、花崗岩に据え変えられ、据え変えられた部分は S D 8051 にそろわない。

V 期北面階段 S X 8031 は、幅 5.4 m、出は 1.9 m である。

(7) 東・西面階段

I 期東面階段 S X 8035 は、出は約 1.2 m と推定される。掘込地業を伴う。掘込地業の幅は約 5 m で、S B 8000 の裳階部分の間分、S C 8055 に対応する。南半の断割部分で、S X 8035 地覆石または踏み石とみられる凝灰岩 (S X 8036) を確認した。

II 期東面階段 S X 8040 は、出は約 1.2 m 程である。S X 8035 北側に積土をして拡張する。幅約 8.4 m で、S B 8000 の裳階柱筋から入側柱までの 2 間分、S C 7510 の回廊幅に対応する。改造の時期は南面階段の改造に先行する可能性もある。なお、「宝字記」の記載の検討からは、奈良時代後半の回廊は複廊と考えられる。

V 期東面階段 S X 8041 は、9.7 m、出は 2.0 m である。

西面階段でも、大きく 2 時期の変遷 (S X 8043・8045) と掘込地業を確認した。この変化は S X 8035・8040 にそれぞれ対応する。V 期の西面階段 S X 8046 も東面階段同様である。

(8) 雨落溝

基壇周囲に II 期の玉石の雨落溝 S D 8050・8051 がまわる。南側の S D 8050 は幅 40 cm、深さ 10 cm、20 cm 程度の玉石を 2 列に並べ底石とする。北側の S D 8051 は、幅 60 cm、深さ 10 cm で、20 cm 程度の玉石を 3 列に並べ底石とする。外側は玉石の側石を立てる。いずれも基壇側は、II 期基壇延石を、側石に兼用する。S D 8051 は S X 8027 にもまわるが、S X 8020 の周囲には雨落溝がない。

III 期には、S X 8075 の上に厚さ 12 cm ほどの凝灰岩切石がのる。中門の調査でも確認した雨葛と考えら



第15図 東面階段北半部分 (東より)

れる。遺存状態が悪く、北階段周辺を中心に中金堂北側で何か所か確認したが、南面では一切検出できなかった。

(9) 廃仏毀釈以降の遺構

須弥壇 S X 8110 S X 7950上に、明治17年に積み直された須弥壇。東西20m・南北6m・高さ1m。外装は明治時代には石垣、のちに花崗岩の壇正積に改造される。

土坑 S K 8115 S X 7950東半、黒色土から掘込む皿状の土坑。板ガラスなど近代の遺物が出土し、かつ S X 8110に覆われるので、時期は明治7～17年である。明治7年の須弥壇削平は床張りのためで、この部分を掘下げる必然性はなく、明治7年鎮壇具出土時に掘られたものであろう。金延金・コハク玉破片・和同開珎破片などが出土した。S X 7950中央部及び西半については断割調査の他、金属探知器で調査を行ったが、土坑状の落込や金属反応はなかった。

礎石 S X 8120 S X 7950西半に位置し上面に直径60cmの円形の平坦面を作り出す。石材は安山岩。上部平坦面に直径約12cmくぼみおよび十字状の刻線をもつが、刻線は正方位から約20度ふれる。黒色土から深さ70cmほどの据付が掘込まれ、破碎した花崗岩を根石状にかませて据える。据付掘形からは近代に下る遺物が出土し、石が据えられたのは須弥壇が削られた明治7年から、積み直された17年までの間である。礎石西側中央付近の据付埋土最上層から、大量の水晶玉・真珠がまとまって出土した(第16図)。上面中央に一辺約30cm、高さ約45cmの角柱石材をすえ、その上に一辺約45cmの正方形の石材をのせていた(第16図)。これらは須弥壇築成時に埋まるが、最上部の石材は S X 8110の上面に出て、S B 8100で後補の支柱状の柱の礎石となっていた。

土坑 S K 8125 S X 8110南西角、地覆裏込のすぐ内側で、S X 7950黒色土から掘込む。径15cm・深さ5cmほどの小土坑。水晶丸玉や辻玉が出土した(第35図)。

その他の廃仏毀釈以降の遺構 床束 S S 8130は S B 8100に床を張った際の床束である。廃棄土坑 S K 8131～8135は、北側の裳階部分に造られ、花崗岩片、近世・近代の瓦・土器類が出土した。



第16図 廃仏毀釈以降の遺構

(左：S X 8120水晶玉等出土状況 右上：S X 8120断面、北より 右下：金延金出土状況)

廃仏毀釈後の鎮壇具埋納坑 須弥壇 S X 8110 上および基壇上で、中央とそれを東西南北に囲む、明治から大正にかけての鎮壇具埋納坑 5 基を検出した (S X 8101～8105)。

S X 8101 須弥壇中央で検出した東西100cm・南北105cm・深さ97cmの土坑。底面に水瓶形の容器を納めた木箱を据える。木箱は、厚さ2cmの板材をもちい釘留めにした縦横17cm・高さ30cm以上のもので、上蓋はすでに破損していた(第17図)。

水瓶形容器は、金銅製で総高25.5cm。いわゆる仙蓋形水瓶(軍持)を模したものであろう。本体は長卵形の胴部と径2.9cm、高さ4.7cmの円筒形の頸部、および裾径8.4cmの低い高台からなる。頸部には印籠蓋をかぶせ、頂面中央に注口(尖台)にあたる高さ3cmの中実の丸棒がつく。この棒の付け根と頸部中程、および高台の上辺を起点に4方向に組紐がかけられていた(第18図)。胴部側面には4行にわたり「興福寺中金堂鎮／明治十七歳十二月十日／謹修當寺住職／園部忍慶敬白」との銘文が刻まれている。清水寺住職であった園部忍慶は、明治14年9月より兼務住職に任じられており、同16年の中金堂返還後、18年1月の本尊他安置仏の奉安、21年4月の還仏会にむかう時期の鎮壇であることがうかがえる。なお、X線撮影によって、容器内には玉類などが納められていることが判明した。

S X 8102 須弥壇中央から東に2.2mの地点で検出した鎮壇具埋納坑。東西31cm・南北47cm・深さ56cm。土坑底面に、箱形の容器を南北方向に納める(第19図)。

容器は、金銅製で経箱あるいは密教の用具などをおさめた戒体箱にみられる形制をとる。本体は、縦30.6cm、横14.8cm、総高15.3cm。下部には長辺4箇所、短辺2箇所の格狭間を透かした床脚を付す。蓋表と体側4面に唐草を線刻で表す。以下、4基の容器は同型式であり、いずれも内底面に金銅製の銘板を据える。S X 8102では、銘板上中央に銀色を呈する小壺を置き周囲に4枚の銭貨を納める(第22図1)。小壺は、総高6.3cm、体部径8.6cmの薬壺形で、径5.7cmの蓋には山形で扁平なつまみをつける。体部は上下二段に花唐草と鳥文、蓋表には内区に鳥文と飛雲文、外区に花唐草を配し、地を魚子で埋める(第21図2)。小壺内には、銭貨11枚と真珠5粒が納められていた。



第17図 S X 8101検出状況(北東から)



第18図 S X 8101金銅製水瓶形容器

S X 8104 須弥壇中央から西に2.4mの地点で検出した鎮壇具埋納坑。東西30cm・南北54cm・深さ68cm。土坑底面に、箱形の容器を南北方向に納める(第20図)。

容器の内部には、銘板上中央に合子を置き、周囲に95枚の銭貨を納める(第22図2)。合子は径3.6cm・高さ2.9cmで、蓋上面に文様を刻む。中に、垂飾形をした赤色の玉類を納めていた(第21図1)。

S X 8105 須弥壇中央から南に1.6mの地点で検出した鎮壇具埋納坑。東西64cm・南北52cm・深さ83cm。土坑底面に、箱形の容器を東西方向に納める。

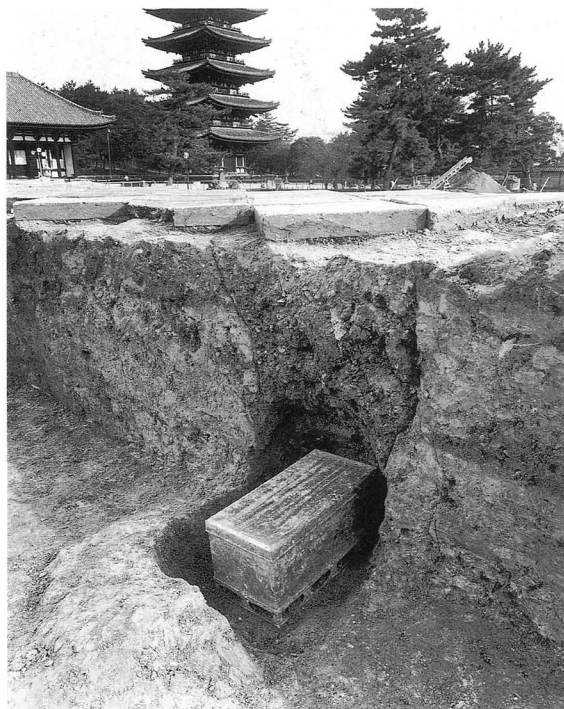
容器の内部には、銘板上中央に合子を置き周囲に緡銭5緡等を納める(第22図3)。合子は、S X 8104のものと同形式で、径4.2cm・高さ3.1cm。中に垂飾形・勾玉形をした緑色・青色の玉類を納める。

S X 8103 弥壇中央から北に2.5mの地点の基壇上で検出した鎮壇具埋納坑。東西58cm・南北43cm・深さ63cm。土坑底面に、箱形の容器を東西方向に納める。

容器の内部には、銘板上中央に金色を呈する小壺を納める(第21図3)。小壺はS X 8102のものと同形式で径8.8cm、総高6.3cm、蓋径6.2cmと体部の形態と蓋の径にわずかな違いがみられ、文様の細部にも差異がある。中には垂飾形・勾玉形をした黄色の玉類、金環、舍利容器が納められていた。

4基の容器内の銘板に刻まれた銘文は、東西容器が同文、北がほぼ同文で、南は前三者とは文・字体ともに異なるものである。東西容器銘板では、「興福寺金堂鎮壇銘竝序／大正五歳丙辰十月興福寺沙門良謙等／追遵先蹤虔修鎮壇曩明治」にはじまる銘文が、18行にわたり刻まれており、金堂修造にいたる経過が述べられている。ただし、年代を確認することのできた銭貨には、大正6年および同7年鑄造のものも含まれるため、実際の埋納がいつ行われたのかについては、さらに検討する必要がある。

小壺と合子は、明治40年に東大寺大仏殿須弥壇において発見された銀製鍍金狩獵文小壺、および水晶製合子を手本とした可能性が高い。また、上述のように玉類にはそれぞれの色彩に傾向性があり、小壺を含め、七宝としての金、銀、瑠璃、珊瑚、瑪瑙、真珠、琥珀に見合った、あるいは見立てたものであること、そしてこれらが埋納された方角にも儀軌上の意味を見いださう可能性がある。



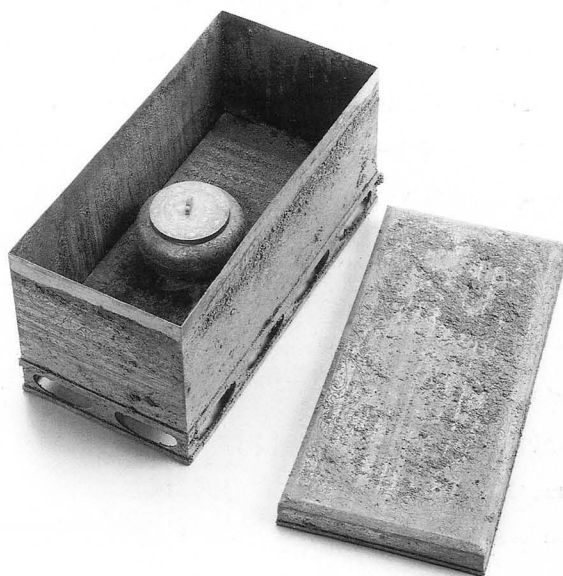
第19図 S X 8102検出状況(北西より)



第20図 S X 8104検出状況(北より)



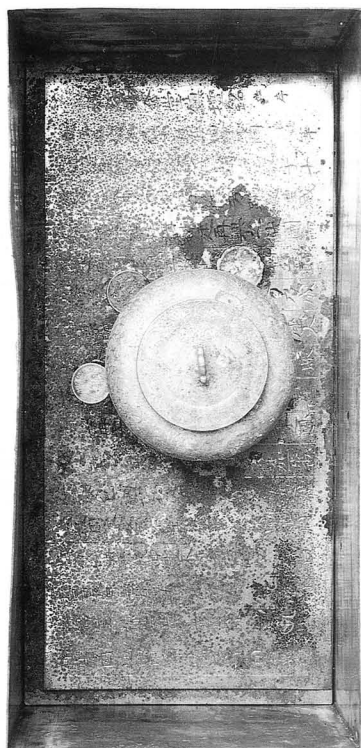
1



2

3

第21図 金銅製箱形容器と鎮壇具 1. S X 8104合子 2. S X 8102小壺 3. S X 8103(上が西)



1

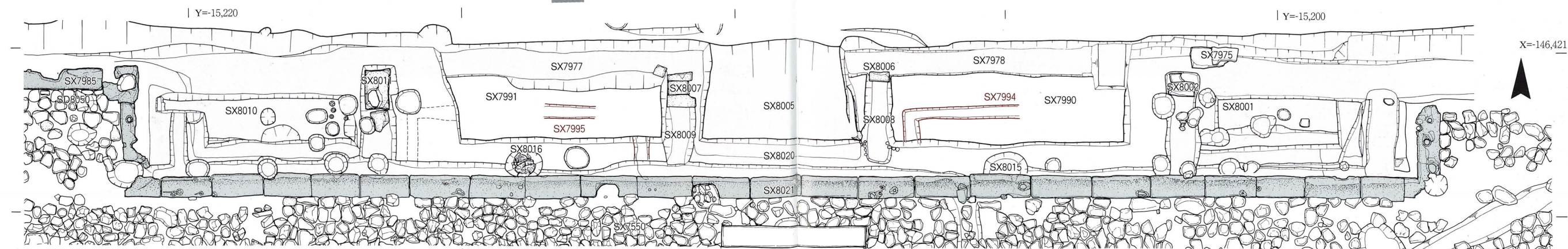
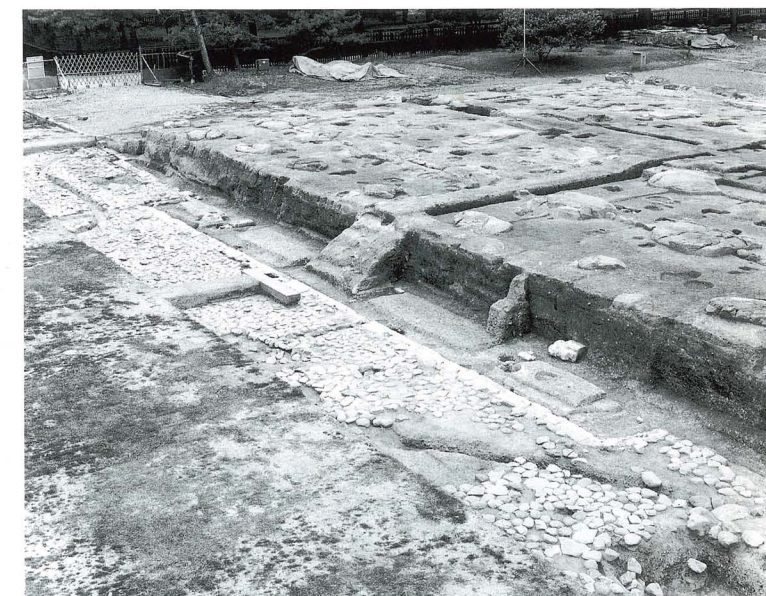
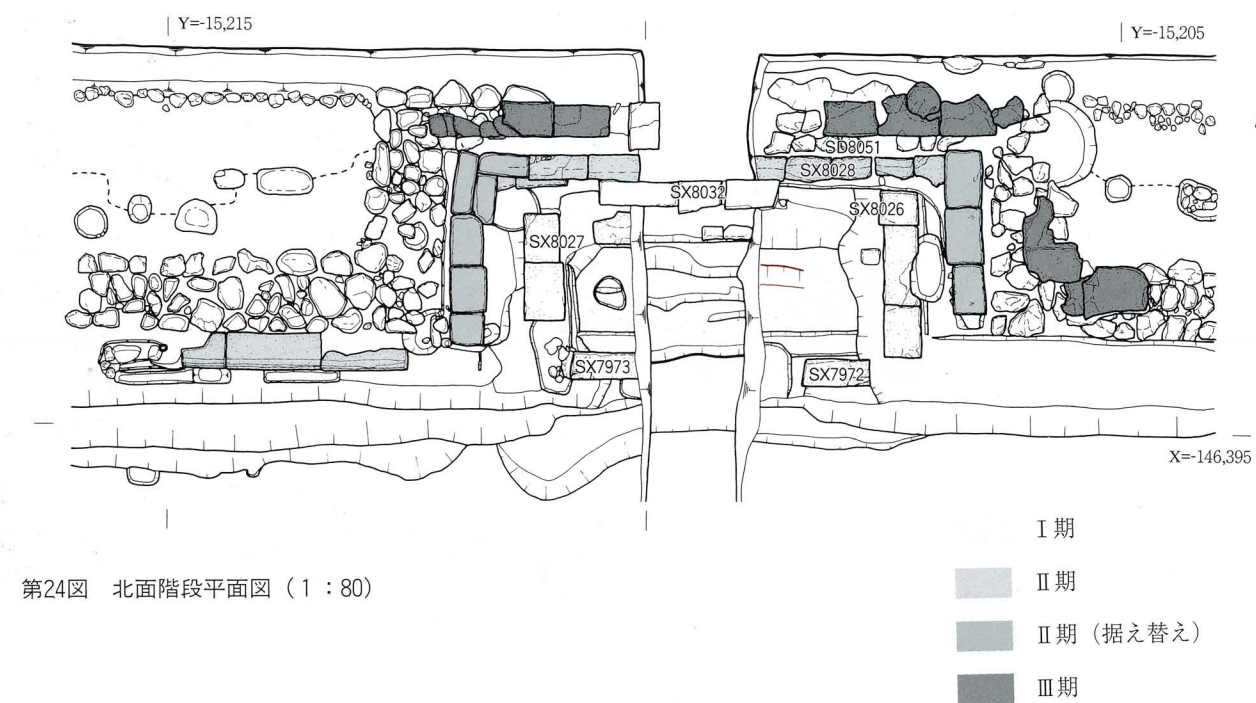
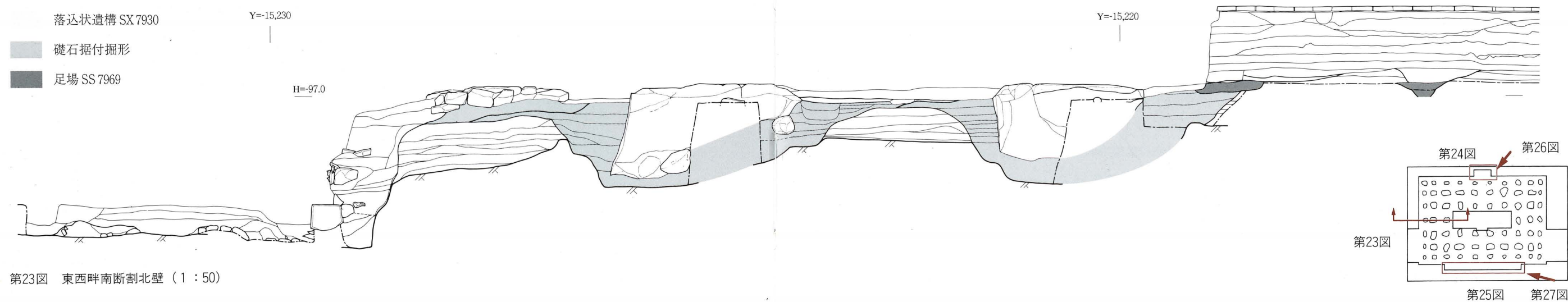


2



3

第22図 箱形容器とその内部 1. S X 8102(上が北) 2. S X 8104(上が北) 3. S X 8105(上が東)



4-2 北面回廊

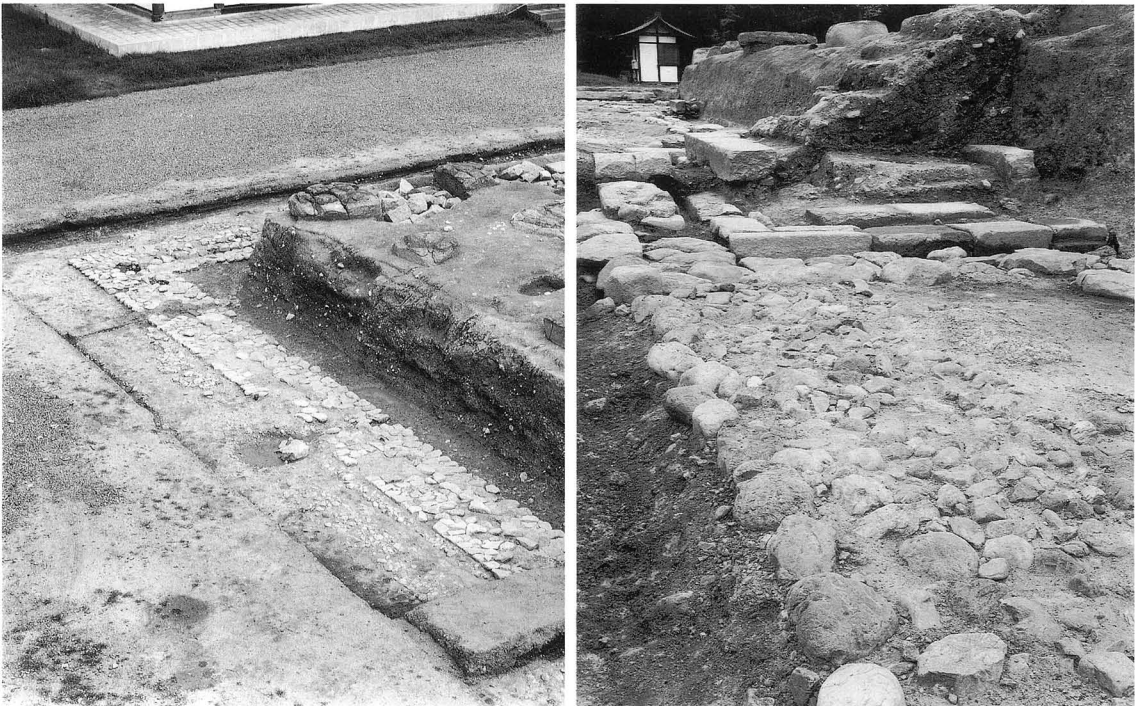
北面東回廊 S C 7510 複廊で、幅約10m。2間分を確認した。基壇南半は地山削出しで、北半は積土である。地山削出しの幅は S X 8035と対応し、S C 7510以前に単廊 S C 8055がある。北側に、凝灰岩の地覆石抜取痕跡 S X 8053、玉石の雨落溝 S D 7516がある。S X 8053は前回の調査で検出した S X 7517と一連の溝である。S D 7516は、幅40cm・深さ10cmで、両側に玉石の側石を立てる。S D 8051につながっている。

北面西回廊 S C 8065 複廊で、幅約10m。約3m分確認した。基壇の状況は S C 7510と同様で、S C 8065以前に単廊 S C 8070がある。基壇南側には凝灰岩地覆石列 S X 8066があり、その外側に幅40cmの玉石敷犬走 S X 8067が通り、さらに外側に玉石の雨落溝 S D 8068がある。S X 8066の石材の大きさは不揃いで、転用材である。S D 8068は、S D 8050と一直線状につながり、S B 8000基壇南面と S C 8065基壇南面との差を S X 8067が埋めるような状況である。S X 8067・S D 8068ともに30cm程度の玉石を主体とするが、上面が平坦面でなく、敷き方も粗い。これら基壇南側の遺構は、S D 8050などより時期が下がる。S C 8065北側には、凝灰岩地覆石列 S X 8071、玉石雨落溝 S D 8072がある。S X 8071の一石の大きさは長さ60cm・奥行40cmで、S X 7982の石材と同質・同規模である。S D 8072は S D 7516と同じ状況を示し、S D 8051につながる。基壇北側の遺構はII期の遺構である。

4-3 中金堂周辺の遺構

(1) 舗装

I期バラス敷 S X 7990～7992 S X 8020・8040によって埋められたバラス敷の舗装。S X 7992は、S X 8035側に玉石見切石列 S X 7993を伴い、S X 8035・S C 8055に対応する。バラスが認められるのは、中金堂基壇から3mほどまでの間である。また S X 7990・7991下層で、I期階段地覆石と平行な幅20cm・深さ5cmの溝状遺構 S X 7994・7995を検出した。バラス敷以前に一時期想定でき、犬走の縁石抜



第28図 基壇外周の様子（左：S X 8075西北コーナー、南西より 右：S X 8076見切石、北西より）

取または据付痕跡の可能性はある。なお、S X 7990～7992のいずれにおいてもバラス上面で焼土は認められなかった。

II期玉石敷 S X 7550・8075 S X 7550は、前回の調査でも検出した、中金堂基壇南面に広がる玉石敷。石の敷き方に幾分粗密があり、中央一間分で最も緻密に石を敷く。中央部分で何石かについて確認したところ、目地には焼土が入り込むが、裏側までは入らない。S X 8075は、S D 8051の外側に幅90cmでまわるテラス状の玉石敷。外側見切石を伴う。見切石は高さ約5cmほどである。

北側バラス敷 S X 8076 S X 8075の外側に幅100cmほどでまわるバラス敷。外側に15cmほどの玉石による見切りを伴う。S X 8075と同時期か、先行する。

東側玉石敷 S X 8085 調査区東北隅のL字型の玉石敷。幅1.6m、両側に見切石を伴う。見切内部は敷き方も粗く、下層に焼土も観察された。S X 8067に似る。

(2) その他遺構

埋甕遺構 S X 8015・8016 S X 8005先端東西、階段から約2.5mにある。据付掘形は直径70cm・深さ25cmほどで、S X 8016では甕も一部残存していた。推定復元径80cm以上の須恵器の甕である。南面階段がS X 8020に改造される際に壊される、I期の遺構である。

土坑 S K 8060～8064 S C 7510北側に集中する土坑群。重複関係から、S K 8060が最も古く、S K 8064が最も新しい。S K 8064は焼け土を含み、飾り金具なども出土した。

瓦暗渠 S X 8090 中金堂基壇南面に、基壇幅分東西にのびる。丸瓦を凸面を上にして伏せて並べる。東側は回廊雨落ちにつながる様相を呈するが、残りが悪く判断しがたい。西側は、中金堂基壇西端にそろえて南に折れる状況が確認された。瓦は中世。側柱からの距離約7mで、応永再建中金堂の軒の出とほぼ一致する。また、建物から同じような距離にある遺構として、西側の溝S D 8091がある。III期の遺構である。

帷舎 前回の調査で検出したS B 7531・7532・7533・7534の隅柱などの柱跡を検出した。



第29図 S X 8090 (南東より)

第30図 S K 8060～8064 (南より)



第31図 S X 8016 (北西より)